

エディット・シュタインにおける「心的なものの因果性」の問題  
——レアールな生状態と生感情の告知——

Das Problem von "Psychische Kausalität" bei Edith Stein:  
Die Bekundung von realer Lebenszustand und Lebensgefühl

中川 暖  
Dan Nakagawa

### 要旨

本論文は、エディット・シュタインにおける「心的なものの因果性」の概念の位置付けを再検討することにある。たとえば、私に突如として引き起こされる高揚感や疲労感のような「心的な状態」の要因は、どのように捉えられるであろうか。シュタインは、心的な状態をレアールな生状態（生命力）による生感情の告知という現象として捉えた。また、その現象は「因果性」と「動機付け」との間の境界にある特定の心的な状態として考察される。本論文では、心的なものの因果性の概念を、生状態としての「レアールな自我」の告知としての生感情において捉え直すことにする。その際に、テオドル・リップスとアレクサンダー・プフェンダーの感情論との思想的な接続を考察することで、リップス学派及びミュンヘン・ゲッティンゲン学派が主に提示した現象学的实在論の中に、シュタインの現象学を位置づけることにする。

### はじめに

エディット・シュタイン (Edith Stein, 1891-1942) は「心的なもの (Psychisches) <sup>1</sup>」の概念をどのように捉えていたのか。シュタインは、1917年の博士論文である『感情移入の問題について』(ESGA6:1917) や 1918-1922年の『心理学と精神科学の哲学的基礎づけに関する寄与論稿』(ESGA6:1918-1922、以下:『寄与論稿』)の第一部「心的なものの因果性„*Psychische Kausalität*“」において、心的なものを「心的なものの現実性 (psychische Wirklichkeit)」という階層構造にて分析している。その階層構造とは「心理物理的個体 (psychophysisches Individuum)」における「心 (Seele)」、「意識 (Bewußtsein)」と「意識流 (Bewußtseinstrom)」、「生感情 (Lebensgefühl)」と「生状態 (Lebenszustand)」を重層的に捉えたものである。シュタインにおける「心的なもの」に関する議論は、フッサールの超越論的観念論に対する批判的な見解が示されつつ、フッサール現象学とは別の潮流として見出された、リップス学派及びミュンヘン・ゲッティンゲン学派が主に展開した「レアールな心的なもの」に関する感

<sup>1</sup> シュタインにおける「心的なもの」はコンラート＝マルティウスから援用された術語であり、精神や身体とは区別された特異な事象である。心的なものは心理や霊魂という概念規定では表現できないものである (MacIntyre, 2006/2007: 110)。

情論からの影響を受けている。特に、テオドール・リップス (Theodor Lipps, 1851-1914) やアレクサンダー・プフェンダー (Alexander Pfänder, 1870-1941) における感情論との接続は想定される。

本論文で着目したいのは、シュタインが「心的なものの因果性<sup>2)</sup>」を構成する「心的なもの」と「因果性」という内容の異なる二つの術語を結合させており、両者がどのように関連しているのかを模索している点である。心的なものは「身体 (Leib)」と「精神 (Geist)」の間に存在する。身体は「因果性 (Kausalität)」の連関によって支配された自然的世界、精神は「動機付け (Motivation)」の連関によって支配された精神的世界に組み入れられており、心的なものは、因果性と動機付けの相互作用のうちに位置づけられる。本論文の目的は、シュタインがどのように「心的なものの因果性」を分析したのかを、リップスやプフェンダーの感情論を援用することで明らかにすることである。

## 1. フッサールとシュタインにおける「意識と心的なものの境界線」の問題

### (1) 因果性と動機付けの境界線

因果性と動機付けの境界線は、シュタインが編纂した『イデーニイ』(IV) の中で主題的に説明を試みていることは周知されている<sup>3)</sup>。それ以前の『イデーニイ』(III/I) の第47節の脚注では、因果性と動機付けの境界線は以下のように記述されている<sup>4)</sup>。

動機付けというこの現象学上の根本概念は、純粋な現象学領域を切り離して取り出すという、『論理学研究』において行われた事柄と結び付いて、直ちに私にとって生じてきた根本概念であり—しかもそれは、超越的な実在領域に関係する因果性という概念と対立するものとして、生じてきたのだが—、この根本概念は、我々が例えば

<sup>2)</sup> 「心的なものの因果性」の概念に関する先行研究を整理しておきたい。第一に、マッキンタイア (2006/2007) の研究では、心的なものの因果性を外部からの影響や結果としてのみ理解できるような心的なものや意識の側面を強調して捉えており、更に、心的なものの説明を自然のおよび社会的な事象の共同体性の内に位置づけて解釈している (MacIntyre, 2006/2007: 110)。当該研究では、心的なものの因果性を外的印象との関わりにおいて分析し、歴史、文化、社会、民族のような共同体論との接続を重視し、生感情と生状態の分析からは切り離している。第二に、ベツチャート (2011) の研究では、心的なものの因果性をフッサールの『イデーニイ』期の問題圏域から区別しており、生感情と生状態の分析を意識に内在化された心的な現象との比較によって分析している (Betschart, 2011: 6-15)。たしかに、当該研究では、心的なものの位置づけを、生感情や生状態との関係で解釈している点は評価できる。しかし、シュタインが心的なものの概念をどのように受容したのか、フッサール現象学をどのように乗り越えたのかについては考察されていない。上記の先行研究を踏まえて、本論文では、シュタインとフッサールの意識と心的なものの理解の相違点を浮き彫りにしたうえで、シュタインがどのように「レアルな心的なものの状態」を分析したのかをリップス現象学及びミュンヘン・ゲッティンゲン学派の感情論を援用することで明らかにする。

<sup>3)</sup> 『イデーニイ』は1918年にシュタインにより編纂されてから、1924-1925年にラントグレーベ達に受け継がれて、フッサールの死後1952年にようやく出版されることになる。シュタインは、『寄与論稿』において『イデーニイ』が未だ出版されていないことに言及しながらも、自分自身の主張に多大なる影響を与えたことを記している (ESGA6: 8)。

<sup>4)</sup> ESGA6: 40-41.

目的の意志に関して、それが手段の意志を動機付けると言うことを可能にするような動機付け概念を、一般化したものである。(III/I: 112)

因果性と動機付けの区別化は以下のように意義付けられている。因果性の概念は「超越的な実在領域」に関係している。「実在性 (Realität)」とは、時間-空間的かつ因果的な自然や感覚的事物のような「事物 (res/Ding)」を意味する<sup>5</sup>。それに対して、動機付けは「純粋な現象学領域」に見出される。ここでの純粋な現象学領域が現象学的還元という手続きを経て見出される意識に「内在的な」かつ「実的な・レールな (reel)」志向性の領域を意味するとすれば、動機付けは純粋体験の領域の法則になる。実際に、『イデーII』では、動機付けは歴史的—文化創造的な「精神生活の法則性」(IV: 220) と称される「志向性の領域」を指すことで、環境世界における因果性の法則性とは直ちに区別される (IV: 220-223)。そして、体験の動機付けは因果性を現象学的還元したものである<sup>6</sup>。

シュタインは、フッサールに従って、自然科学と精神科学の領域の境界を確定することを目的としている<sup>7</sup>。フッサールが示した因果性と動機付けの定式化を、シュタインは引き継いでおり、自然科学の領域で因果性という連関を、精神科学の領域で動機付けという連関を受け入れている。そのうえで、最終的には、シュタインは「因果性と動機付けの連結 (Ineingreifen)」(ESGA6: 64) ないし「因果性と動機付けの相互作用 (Zusammenwirken)」(ESGA6: 69) という心的なものの法則性を提示する。

## (2) 意識と心的なものの境界線

シュタインは、1900年以前のブレンターノ、ミュンスターベルク、ナトルプのような、経験的心理学による「意識と心的なものの混同」を抱えた研究に依拠する限りでは、心的なものの解明が不十分であることを指摘する (ESGA6: 8)。それに対して、フッサールが『厳密な学としての哲学』(XXV: 1911) から『イデーI』において提示した「心理学と現象学の境界線」の問題を、シュタインは高く評価している (ESGA6: 9)。そして、さしあたりこの時期にフッサールが批判的な姿勢で取り組んでいた、心理学における心的な現象や心的な体験の位置づけをシュタインは受容している (ESGA6: 9)。『厳密な学としての哲学』では、「意識の自然化」への批判を巡る議論の際に示されるように、心的なものは、経験的意識に即して自然の連関の中に位置づけられて捉えられるような経験心理学に基づいている (XXV: 22)。より詳細に、フッサールは、『イデーI』第53/54節の議論において、心的なものの意識を「心理物理的個体」という心的なものと物的なものの二つの世界を並列させることで、ひとつの実在的な出来事の連関に組み入れていた (III/I: 103-105)。とはいえ、心的なものは、記述心理学の試みでは「意識の相関関係」において捉え直されており、すべて

<sup>5</sup> 本論文では、自然的事物を「実在性」、心的な状態を「レールなもの」と表現する。

<sup>6</sup> III/I: 112-113, Bernhard Rang, 1973: 115.

<sup>7</sup> Genki Uemura, Alessandro Salice, 2018: 129, 142.

の心的なものの体験は絶対的な体験の諸連関を表す指標になる (III/I: 106)。たしかに、シュタインは、フッサールの研究が意識と心的なものの必然的な分離に基づいている限りで、現象学的研究の基礎になることを評価している (ESGA6: 8)。とはいえ、少なくともシュタインは『寄与論稿』序論の末尾でフッサールに提言している。

ところが、もし我々がすべての位相の相関関係からノエマ的な意味での意識を分離するならば、このことは、根源的時間意識についてのフッサール自身の研究によって余儀なくされるように我々は思うのである。そして、我々はこれについてフッサールの承認を得ることを望んでいる。(ESGA6: 11)

シュタインは、フッサールの超越論的観念論による意識構造に対して批判的な提言を試みているといえる。上記の引用で示されるのは、おそらくフッサールが『イデー I』で示した、ノエマ-ノエシスの意識構造を意識の構成要素に含めるのではなく、むしろ、根源的時間意識を論じる際にもノエシスを意識流に含めているゆえに、ノエマとノエシスを切り離すべきであるという、フッサールに対する要望に解釈できる<sup>8</sup>。

上記の観点からもシュタインが完全にフッサールの超越論的現象学におけるノエマ-ノエシスの意識構造に賛同しているわけではないことは読み取れる。それゆえ、シュタインがフッサールの意識と心的なものの位置づけに関しても、どこまで賛同していて、あるいは、フッサールをどのように乗り越えているのかについては更に分析する必要があるように思われる。

### (3) シュタインにおける心、意識流、生感情と生状態の差別化

『感情移入の問題について』や『寄与論稿』は、シュタインがフッサールの助手として『イデー II』を編纂していた同時期に記された著作である。シュタインは、人間の心的なものの構造を 1.心、2.意識と意識流、3.生感情と生状態の階層構造において説明している。

#### 1) 心理物理的個体における「心」

第一に、心理物理的個体は、我々が心的なものの現実性を認識する際に物的なものの現実性を媒介としているという視座の下で分析される。たとえば、19 世紀の経験的心理学で使用された因果法則である「連合原理 (Assoziationsprinzip)」(ESGA6: 5) や、「心理物理的並列性と相互作用理論の間の対決」(ESGA6: 5) のような、心的なものと物的なものの連関性や対立を巡る研究である。心理物理的個体は、「身体」の影響に依存する実体的な統一

<sup>8</sup> ベツチャート (2011) の研究では、この提言は、現象学的心理学の道に進むためにあたかもフッサールによる意識の構造を放棄するべきであるかのような、フッサールに対する要望にも解釈できる

(Betschart, 2011: 14-15)、と指摘されている。当該研究は、この提言をシュタインの現象学的心理学の試みの出発点になることを見据えているが、この提言に対する釈義の展開としては些か飛躍的な解釈であろう。

体としての「心」によって形成されている。心は、「身体的なものに束縛された意識」である。心的なものの体験は、精神生活が現実化した「身体に束縛された感覚 (Empfindung)」によって引き起こされる (ESGA5: 66)。身体に束縛された感覚とは、美味しい食事の楽しさ、感覚的な痛みによる苦しみ、柔らかな衣服の心地よさ、食べ物の味わい、どこにその痛みが突き刺さっているのか、どこでその衣服が体の表面に触れているのかを気づかせてくれるような、外的印象によって引き起こされる感覚や感情である (ESGA5: 65)。シュタインは、第一に、身体に束縛された感覚を、知覚の形式に基づく「感情的感覚 (Gefühlsempfindung)」 (ESGA5: 65, 118) や「感覚的感情」 (ESGA5: 65, 118) という「生身のありありとした感情」と捉えている。第二に、感覚的感情は、私のうちにも存在し、私の自我から溢れ出るような「精神的感情 (geistiges Gefühl)」でもある (ESGA5: 65)。それは外部知覚やエネルギー、我々の行動に告知される心的なものの特徴を持つ。たとえば、我々の意志作用の緊張または弛緩は、我々の意志の実行を告知し、意志作用は感情の強度、活発さ、情動の興奮を通して現れる (ESGA5: 65)。身体に束縛された感情の根底にある精神的感情は、身体に束縛された感情ではなく、感覚的感情に影響を与える感情である。たとえば、「高揚 (Frischigkeit)」「疲労 (Mattigkeit)」「過敏性 (Reizbarkeit)」「疲労困憊 (Erschöpfung)」「睡眠 (Schlaf)」が身体に告知されるという事象である。第三に、「共通感情 (Gemeingefühle)」 (ESGA5: 65, 118) とは、精神的感情としての高揚や疲労を感じているときに、同時に、身体活動に高揚や疲労が現れる感情である。この点において、シュタインは、精神的感情と身体に束縛された感情との相互作用の現象に着目している。精神的感情が身体に束縛された感情に対して、「現象的な影響」を与える様式が「心的なものの因果性」として語られる。

## 2) 意識と意識流 (体験流)

第二に、シュタインは、体験を 1. 「志向的体験」と 2. 「非-志向的体験」に区別する<sup>9</sup>。1. 「志向的体験」は、感覚データが意識に与えられることで感覚が実的な構成要素となり、それらが意識流の統一によって構成される体験である (ESGA6: 12)。シュタインは、志向的体験を、「ノエシス (上位の段階)」「ノエマ (下位の段階)」「意識流 (最下位の段階)」という階層構造において説明する (ESGA6: 10)。シュタインは、ノエシスとノエマを上位と下位の段階に切り離しているといえる。ここで示されるのは、すべての「ノエマ的なもの」は、本来的な意識的生活である「ノエシス的なもの」に対応するが、意識は各段階において異なる方法で作動しているということである (ESGA6: 10)。シュタインによれば、この意識作動のおかげで、より低次のノエマ的なものの統一は、より高次の統一を構成する多様体になる (ESGA6: 10)。そして、シュタインは、意識の最下位の段階にある根源的な「意識流」を、ひとつの意識体験を構成する「体験流の統一体」とみなしている (ESGA6: 12)。この点にお

<sup>9</sup>シュタインは、「志向的体験」と「非-志向的体験」を上部構造と下部構造として説明しているが (ESGA6: 25)、それらを明確に区分して構造化したのは、ベツチャート ((2011) の研究である (Betschart, 2011: 32-33))。

いて、意識ないしは体験を構成する体験流と構成される体験が区別される。『感情移入の問題について』では、意識流と心は、同じく心的なものの構成要素とみなされるが、両者は区別される (ESGA5: 55)。というのも、心的なものの統一構造は、意識流の特異な体験内容に依存しており、意識流を通して心の構造は規定されるからである (ESGA5: 55)。より詳細に、1920年のブレスラウ講義を編纂した『哲学入門』(ESGA8: 1920)では、心的なものの構造は、意識や意識流、身体とは区別化された「レアールな心」として語られる (ESGA8: 124-127)。ただし、心的なものや意識流は連関しており、心的生活が意識に現れることは、その人の心的体験に特有の意識流を告知させることであると述べられる (ESGA8: 125)。

### 3) 生感情と生状態

第三に、2. 「非-志向的体験」とは、生の領域に属する「生感情」(上部構造)と「生状態/生命力」(下部構造)としての「レアールな自我」によって示される<sup>10</sup>。シュタインは、生状態を意識流の下位の段階に位置づけており、生状態に限定された生感情を発見している (ESGA6: 26)。更に、非-志向的体験は、レアールな生状態の変化に根差した生感情に「内部データ」が与えられる体験を意味する (ESGA6: 22)。その場合の「生感情と生状態の連関性」をシュタインは以下のように説明する。

生感情の中に私の自我の瞬間的な性質が現れる。その生状態、そして、そのような性質の変化において、持続的でレアールな性質が現れる。それが生命力である。このレアールな特性を持った自我はもちろん、純粹体験の放射点としての根源的に体験された純粹自我と混同されてはならない。レアールな特性を持った自我は、その特性の担い手として、内部データの告知を通して与えられるような超越的でレアールなものとしてのみ理解されるが、それ自体が内在化されることはない。我々はこのレアールな自我、その性質を心的な状態と呼ぶ。そして、意識と心的なものは根本的に相互に異なることがわかる。「意識的な」純粹体験の領域としての体験かつ体験内容に現れる意識領域と、超越的でレアールな領域としての心的な領域は異なるのであるが、ここで我々はこのレアール性を物理的な実在性や他の既存の実在性とは区別されることを控えなければならない。(ESGA6: 22)

上記の引用では、1. 意識、純粹体験、純粹自我、意識流における内在領域、2. 超越的でレアールな生状態の心的な領域が区別されている。1. で示されるのは、感覚データにより引き起こされる「何かについての歓喜や悲しみ」であり、フッサールの志向的体験といえる。

---

<sup>10</sup> マッキンタイアによれば、シュタインにおける生感情と生状態という術語は、ディルタイから継承されたものである (MacIntyre, 2006/2007: 112)。しかし、少なくともこの指摘はシュタイン自身の典拠からは推察できない。

それに対して、2. で示されるのは、生感情とレアールな自我の下に満たされた生状態である。ここでの生状態としてのレアールな生命力は、増加したり減少したりする「生命力の量」を意味する。生感情と生状態の連関は、生状態が様々な生感情にレアールな生命力を「告知 (Bekundung)」という仕方で現れることで結ばれる (ESGA6: 23)。シュタインの「心的なものの体験の位相」に関する記述を整理すれば、以下のようになる<sup>11</sup>。

表1 心的なものの体験の位相

1. 「意識に吸収される内容 (例: 感覚データや幸福感) 」
2. 「このような内容の体験、意識への吸収 (例: 感覚をもって幸福感を感じる こと) 」
3. 「このような体験の意識流 (例: 体験それ自体という意識の流れ) 」
4. レアールな自我の「生状態」が告知された「生感情」
5. レアールな自我の「生状態 (生命力) 」

生状態や生感情は、単純に体験流に分類することはできないし、生状態をそれ自体として心的な状態に当てはめることもできない (ESGA6: 25)。このことは、心的な状態が生領域としての生状態から引き出された力を消費し、使い果たされるならば心的な状態が消滅することにも基づいている (ESGA6: 26)。その場合には、生感情や生状態は他の体験内容に影響を与えるものとして成立している (ESGA6: 26)。シュタインにとって、生感情と生状態の連関構造は、既にフッサールの意識と意識流の統一という構造では示されないレアールな心的なものの構造を開いているといえよう。

## 2. リップスとシュタインによる「レアールな生状態における生感情の告知」の解明

シュタインは、レアールな生状態の告知としての生感情を意識に告知されるという構造において説明している (ESGA6: 21-22)。以下では、意識の中に告知される生感情の現象性を、リップスにおけるレアールな自我の「告知」や「表現現象 (Ausdrucksphänomen)」に関する議論を手掛かりとして再検討する。

### (1) リップスにおけるレアールな自我の「告知」や「表現現象」の解明

リップスは、1901年の『自己意識：感覚と感情』(Lipps: 1901)において、心的なものを「意識現象の直接的な根底にあるもの」(Lipps, 1901: 40)とみなし、より正確には、「心的なものとは自我感情 (Ichgefühl) の根底にあるレアールな自我である」(Lipps, 1901: 40)と述べている。そして、「レアールな自我 (reales Ich)」を「直接的に感じられる自我の基質」

<sup>11</sup> 1~3の区分は、『寄与論稿』のシュタイン自身の「体験の位相」に関する記述を参照している (ESGA6: 18)。4~5の区分は筆者が付け加えたものである。

(Lipps, 1901: 39) や「心的な現象を告知する自我」(Lipps: 1901: 39) と定義している。たとえば、心的なものとは、感覚、表象、感得、意志という意識現象に対する心的な状態や過程というレアルな基質である (Lipps, 1901: 39)。リップスは、意識現象とレアルな自我の連関性を、私に聞こえる「現象的な音」と現象的な音を直接的に引き起こさせる原因としての「空気の振動」と「レアルな音」との関係において記述している (Lipps, 1901: 41)。音源としてのレアルな音は、現象的な音を可能にする空気の振動において私に現れる。実際のところ、現象的な音を可能にしているのは、空気の振動であるにもかかわらず、私に知覚された音色としての現象的な音をレアルな音の表現として我々は理解する。レアルな音に対して、音の感覚を通して与えられるのは「現象的な音」ないしは「音の現象」である (Lipps, 1901: 41)。この具体例に準えて、リップスが提示するのは、レアルな自我は現象的な自我の内に感情において私に現れる、或いは現象的な自我の中でレアルな自我はその存在を感情において告知するという事態である (Lipps, 1901: 41)。現象的な自我は体験されなければ存在しないが、レアルな自我は私の意識に告知されるかどうかに関係なく存在する。リップスは、意識現象として告知された感情の中に、心的なものというレアルな自我を発見する。

しかしながら、意識現象とレアルな心的なものの状態の連関性とはどのような関係であろうか。リップスは、1903年の『美学 I』(Lipps: 1903) において、意識現象とレアルな心的なものの状態の関係を「表現運動 (Ausdrucksbewegung)」—「表情 (Ausdruck)」と「身振り (Geste/Gebärde)」の現象—と「レアルな感情」の連関性として述べている (Lipps, 1903: 141-143)。感情と表情や身振りの連関性は、「記号 (Zeichen)」ではなく「シンボル (Symbol)」の連関である (Lipps, 1903: 140)。記号とは意味されるものが現実であることを我々に示すものであり、シンボルとは、努力、内的行動、内的状態、内的興奮が自分自身の「内的な生活の活動」の様式を直接的に意識に告知するものである (Lipps: 1903: 140)。そして、リップスは、1909年の『心理学原論』(Lipps: 1909) において、表情や身振りに具わる「心的な生活の表出 (seelische Lebensäußerung)」を「シンボル連関」として語る。「心的な生活の表出」を把握する試みは、(1) 「心的な生活の表出」の衝動と (2) 「模倣」の本能的衝動の二つの要因が協力的に活動していることにより示される (Lipps 1909: 229)。悲しみは悲しい表情や身振りを引き起こさせて、悲しい表情や身振りは悲しみをその中で「表出する」ないしは「告知する」。そして、悲しみの感情と悲しい表情や身振りの連関は「本能的衝動」において結び付けられている (Lipps, 1909: 229-230)。たとえば、悲しんでいる他者を私がどのように感じるのかを記述する際には、「模倣運動 (Nachahmungsbewegung)」(Lipps, 1909: 230) の衝動によって理解することができる。私が他者の悲しい表情や身振りの運動を知覚する際に、他者の悲しい表情や身振りの中で現れている悲しみの感情に応じて、私の内に生じてきた悲しみの表出や告知を直接的に捉える (Lipps, 1903: 129)。リップスの議論で示されるのは、レアルな自我が意識現象に対して「告知」や「表現現象」という仕方で現れてくるということである。この点において、レアルな自我と意識に現れる心的現象は区別

される。

## (2) シュタインにおけるリップスの「告知」や「表現現象」の受容と展開

シュタインは、『感情移入の問題について』において、リップスの1903年以降の著作群である『美学I』や『心理学原論』を受容し、心的なものの告知や感情における表現現象の分析を再検討している(ESGA5:53)。シュタインは、リップスの表現現象の問題に対する探究態度を「学問的探求の破綻した説明」(ESGA5:53)であると批判しており、リップスの試みを「我々の精神の不可解な設備」の能力ないし「自然的な本能」によって、ひとつの意識的生を特有の物体(Körper)に束縛させていると評価している(ESGA5:53)<sup>12</sup>。ここで指摘されているように、シュタインは、リップスが表現現象の問題を、模倣運動や本能的衝動という学問では把握できない意識現象をもとに分析したことを批判している。他方で、シュタインは、リップスの告知や表現現象の構造を肯定的に受容している箇所がある。『寄与論稿』では、心的なものは、意識に内在化されない、レアールな生状態による生感情の告知という現象を通して分析される(ESGA6:22)。シュタインは、意識体験の中に告知された生感情を以下のように捉えている。

生感情は体験との関係において超越的なものであり、体験の中に告知される。そして、意識に対する生感情について言えば、その意識になるということ、内在的な内容の体験やその構成要素として、それが内在化する体験の意識と混同してはならない。(ESGA6:21)

シュタインの着眼点は、レアールな自我の生状態に告知された生感情と意識の内在体験を区別することにある。そのうえで、レアールな自我の生状態の様々な変化様態、すなわち、生状態の「強度(Intensität)」や「緊張(Gespannheit)」の「度合い(Grad)」に応じて、生感情が体験の意識のうちに告知されていることを示す(ESGA6:21)。意識に告知された生感情は意識に内在化されるのではなく、あくまでも意識の内在体験に対しては超越的なものとして現れ、意識体験のうちに告知される(ESGA6:21)。ただし、リップスが告知という仕方方で記述した、レアールな自我と意識現象の連関性に、シュタインは現象的な影響関係を読み取る(ESGA6:16,17)。『寄与論稿』の第二章の冒頭では、意識に対して影響を与える「疲労感」や「疲労困憊」という生感情の具体例を以下のように述べている。

私が疲労を感じる時に、生の流れは止まっているようにみなされ、ゆっくり這って進

<sup>12</sup> フッサールは『間主観性の現象学』においてリップスの「模倣本能説」を「現象学的無知の避難所」と否定している。この点において、シュタインは、フッサールやフッサール以降の現象学者たち(シェーラー、インガルテンら)と類似する傾向を持ったリップスの感情移入論を批判している(Zahavi, 2014: 112)。しかし、本論文では、ザハヴィ(2014)の見解とは異なり、リップスにおけるレアールな自我の「告知」や「表現現象」を肯定的に受容したシュタインの議論を考察する。

み、様々な感覚領域で起こるすべてのことが疲労に影響される。まるで色は色を失い、音はメロディーを失ったかのように、そして、いずれの「印象」—いわば、その意欲に反して生の流れに押し付けられるデータ—は苦痛で不快であり、いずれの色、音、感触には悲しみが伴う。疲労感が消え去る時に、他の領域にも変化が起こり、高揚感に変わった瞬間に、その流れは活発に躍動し、前進し疑いなく高揚感と歓喜が息を吹き返す。(ESGA6: 16)

ここで示されるのは、疲労感のような生感情が、聴覚、視覚、感覚に与えられる色、音、感触のような「体験内容」に影響を与えているという事態である<sup>13</sup> (ESGA6: 16, 23)。シュタインは、疲労感や高揚感の影響を受けることで、様々な体験内容の強度や性質が変化するという「現象的な依存関係」を発見する。生感情と体験内容を結び付ける現象的な依存関係は、「物理的因果性」や「動機付け」とは区別される (ESGA6: 16)。

### 3. プフェンダーとシュタインによる「心的なものの因果性」の解明

シュタインによれば、「レアルな心的なものの因果性は、体験の領域という現象的な因果性において告知される」(ESGA6: 24)。ここで示されるように、現象的な因果性は、レアルな心的なものの因果性の出来事が体験の領域のうちに告知知らされることを意味する。ただし、心的なものの因果性を説明する際に、シュタインは、「レアルな因果性」と「現象的な因果性」という区別をしているが (ESGA6: 16, 23, 72-73)、それらの因果性についての積極的な議論はなされていない。以下では、プフェンダーにおける「心的なものの現実性」の原因様式に関する議論を参照することで、シュタインの「心的なものの因果性」の様式に関して再検討する。

#### (1) プフェンダーにおける「心的なものの現実性」の原因様式の解明

プフェンダーは、1904年の『心理学入門』(Pfänder, 1904)において、心的なものの現実性を「対象」と「対象意識 (Gegenstandsbewußtsein)」、「感情 (Gefühl)」、「努力 (Streben)」の心的生活を構成する三要素として分析している。プフェンダーにとって、心的なものの現実性は、非空間的かつ感覚的には知覚できない世界で主観が絶え間なく変化する体験、苦しみ、行動から構成されるものである (Pfänder, 1920: 185)。この体験、苦しみ、行動は対象についての感覚、知覚、想像、思考という様々な種類の「対象意識」に関連している。そして、この対象は「心的なものの現実性の周縁」(Pfänder, 1920: 186)にあり、意識的自我と関連し

---

<sup>13</sup>意識において原因となる出来事は、それぞれの生感情である。生感情により引き起こされた意識体験の原因は、「生領域の変化 (すなわち、生の領域を構成する生感情の変化)」である (Betschart, 2011: 23)。しかし、当該研究では、生感情と体験内容の影響関係の議論に関しては詳細に触れられていない。

ている。この過程において、心的な主観は対象についての意識を持つことになるが、感覚や知覚したものは、歓喜や悲しみのような様々な感情を引き起こさせる (Pfänder, 1920: 203)。プフェンダーは、「感情」を歓喜、悲しみ、快、不快、あらゆる種類の感情的気分、美的感情、同情、反感、満足、不満とみなし、対象意識が様々な感情の変化に起因していることを指摘する (Pfänder, 1920: 203)。感情の変化の原因となる対象意識は、感情を刺激する対象物から完全に消え去ることはなく、他方で、感情も対象意識の背景となり、対象意識の内容に影響を与える。この点において、プフェンダーは、対象意識の内容の変化の原因が感情であることを認めている (Pfänder, 1920: 206)。心的生活を構成する「努力」は、対象意識や感情とは区別された心的なものの現実性の活動性を示す。たとえば、努力は欲求、欲望、願望、切望、希望、意欲や行動のように心的な主観の働きとなる (Pfänder, 1920: 221)。この努力の出現は、努力の働きが対象意識に変化を与えることで明らかになる。その場合には、心的な出来事は、努力の結果として引き起こされた出来事なのか、感情の結果として引き起こされた出来事なのかを混同することになる。

プフェンダーにとって、努力の原因と感情の源泉はどのように区別されるのか。プフェンダーは、1911年の『動機と動機付け』(Pfänder, 1911)において、努力の原因様式を以下のように説明している<sup>14</sup>。第一に、「現象的源泉 (phänomenal Quelle)」とは「自我あるいは自我の特定の感情状態」(例:欠如感、不満、不快感)などを意味する (Pfänder, 1911: 130)。これは心的な状態の前提となるような源である。第二に、「現象的原因 (phänomenal Ursache)」とは「志向的な対象」(例:興奮を引き起こさせる音)を意味する (Pfänder, 1911: 130)。第三に、「レアルな原因 (reale Ursache)」とは、「心理物理的個体と瞬間的な物理的環境を提供する固有の心的な状態の膨大な複合体」(Pfänder, 1911: 130)を意味する。これは心理物理的個体とその周囲の物理的環境の状態(例:手の温かさ、テーブルの硬さ)を引き起こさせるような原因である。プフェンダーによれば、三つの原因様式は、心的な状態の原因であり、それ自体が「意志の動機」を意味するものではない<sup>15</sup>。シュタインは、プフェンダーによる努力の原因様式の分析を参照して、「現象的源泉」が「生状態 (生命力)」であることを指摘する (ESGA6: 55)。たとえば、旅の快適さによって感じる歓喜は自我の態度表明であり、疲労困憊のような自我の状態では、旅の中で休息することで旅を魅力的に感じることもある。シュタインは、様々な努力の働きが生状態としての源泉を通して誘惑されることで「目的を持った努力」に変化することを指摘する (ESGA6: 55)。

## (2) シュタインにおける「心的なものの因果性」の再検討

<sup>14</sup> プフェンダーにおける心的な状態の原因様式に関しては、八重樫 (2009) や植村 (2020) の説明が詳しい (八重樫, 2009: 28-29; Uemura, 2020: 31)。

<sup>15</sup> 植村&サリーチェ (2018) の研究では、シュタインとプフェンダーにおける「動機付け」概念は近いが、動機付けの存在論的な位置づけに関しては相異していると指摘される。プフェンダーは、動機付けを意志に限定しているが、シュタインは動機付けを現在の信念、知覚、感情の様々な体験の中に認めている (Genki Uemura, Alessandro Salice, 2018: 142)。

シュタインは、『寄与論稿』において、プフェンダーの「源泉」、「レアルな因果性」、「現象的な因果性」という術語を援用して、心的なものの因果性の過程について分析している。(ESGA6:25, 55)<sup>16</sup>。その際に、『感情移入の問題について』では、心的なものの因果性は、「恐怖のせいで私の心臓は静止する」という具体例で示される。シュタインは、「自分自身の体験」とその「体験に告知された心の能力の性質」の間に心的なものの因果性という連関を見出しており、この連関が心的なものとの現象的な依存関係であることを示す(ESGA5: 67)。『寄与論稿』では、生感情と他の心的なものの体験の現象的な依存関係は、純粹体験の中に告知された生感情を通じた影響関係であることが示される(ESGA6: 23)。この現象的な依存関係とは、純粹体験に生感情が告知されることによって、生感情が純粹体験にとって現象的な原因となる連関である。そのうえで、生感情の背後にある真の原因、いわば、心的なものの現実性の「源泉」が、「レアルな生命力」であることが主張される(ESGA6: 23)。シュタインは、生命力(生状態)が心的な出来事の源泉であり、その心的なものが告知を通して他の心的なものとの特性の変化を与える連関性を「現象的な因果性」とみなしている。

他方で、『寄与論稿』の第三章では、シュタインは、精神生活の法則である「動機付け<sup>17</sup>」の連関において、生感情と他の体験内容の影響関係を分析する。シュタインは、動機付けを「作用(Akt)」が他の作用に相互に結合する連関とみなし、この作用の中心点を純粹自我に据えている(ESGA6: 36, 37)。作用における相互の連関は、一方の作用から他方の作用が出現すること、一方の作用が他の作用に基づいて実行されることを意味する(ESGA6: 36)。ただし、本来的に動機付けの要因は、結果となる作用の実行ではなく、この作用の体験内容である(ESGA6: 38)。このことは、シュタインが提示している以下のような具体例に表れている。「私の歓喜の動機は、待ち望んでいた手紙が届いたことであり、手紙の到着を知ったことではない」(ESGA6: 38)。この具体例では、私の歓喜が、直前に起こった手紙の到着を知るという実際の出来事ではなく、待ち望んでいた手紙が届くという体験内容が動機となることを意味する。上記の具体例は、生感情と体験内容の影響関係を動機付けの過程で説明することを可能にする。上述したように、生感情という疲労感や高揚感の影響下において、特定の体験内容の強度は変化する。シュタインは、『寄与論稿』の第五章において、生感情と体験内容の影響関係によって因果性と動機付けが相互作用する可能性を指摘する(ESGA6: 64-69)。第一に、歓喜は支配的な生感情の性質に応じてより活発になったり、より鈍くなったりするという仕方で因果的に条件づけられている(ESGA6: 64)。第二に、誰かが私に与え

<sup>16</sup> 八重樫(2009)の研究では、「レアルな因果関係は直接的には体験されえない出来事」であり、「現象的な因果関係は当の努力がそこにおいて生じるところの自我によって直接に体験される」出来事であることが示される(八重樫, 2009: 28)。植村(2015)の研究では、経験における因果性におけるシュタインとプフェンダーの見解を指摘している。当該研究では、「現象的な因果性とレアルな因果性との間には一定の関係が成り立っている」(植村, 2015: 102)ということが主張される。

<sup>17</sup> 植村&サリーチェ(2018)の研究では、シュタインの動機付け概念に具わる二つの要素を明確に指摘している。第一に、「動機付けが意識や感情ではなく、認知体験や知覚体験においても作用していることを認める」。第二に、「体験内容と対象を区別し、動機を前者の一種にみなしている」(Genki Uemura, Alessandro Salice, 2018: 141)。

てくれた歓喜は、今度は誰かを喜ばせようという意図を動機付ける可能性があり (ESGA6: 65)、生感情が体験内容の特定の性格や強度や深みに依存している限りで、生感情の影響それ自体は動機付けられている (ESGA6: 65)。

生感情と体験内容を関係づける因果性と動機付けの相互作用によって、「レアルな心的なものの因果性が、体験の領域という現象的な因果性において告知される」というシュタインの主張を再検討することができる。たしかに、純粹体験とレアルな心的なものは、異なった体験内容によって区別されるが、ある種の連動性を有している。その連動性とは、純粹体験に心的なものが告知されるという連動である。まず意識に直接的に告知されるのは、単純な体験内容である。たとえば、事物の硬度は特定の感触として現れることや私の心的な状態としての歓喜は特定の感情で表現される (ESGA6: 67)。更に、特定の状況下では事物の感覚や動作はより高度に変化する。良いニュースを知ったのであれば、一日中、バラ色の気分になり、このバラ色の気分は私から溢れ出る歓喜を動機付ける (ESGA6: 67-68)。少なくとも意識体験に告知された心的なものは、様々な体験内容を強化したり弱体化させたりするゆえに、意識体験の内在的な反省では見出せないレアルな心的なものの状態が体験内容を動機付けているといえる (ESGA6: 68)。

## おわりに

本論文では、シュタインにおける「心的なものの因果性」をレアルな生状態と生感情の告知という現象から再検討した。その際に、リップス学派及びミュンヘン・ゲッティンゲン学派の「レアルな心的なものの状態」に関する感情論との思想上の接続が見られることを指摘した。シュタインは、フッサールの超越論的観念論に対する批判的な見解を踏まえて「意識と心的なものの境界線」を問題にした。その結果として、レアルな生状態(生命力)による生感情の告知というレアルな心的なものの状態を提示した。シュタインは、フッサールのように、心的なものを「意識の相関関係」とみなすことなしに、生感情が意識に内在化されない意識状態に告知された心的なものであることを示したといえよう。更に、シュタインは、ミュンヘン・ゲッティンゲン学派に見られるレアルな自我の告知という現象を援用して、レアルな生状態が意識に告知されるというレアルな心的なものの領域を重視した。そのうえで、シュタインは、レアルな心的なものの因果性が体験の領域という現象的な因果性において告知されるという事態を指摘した。レアルな生状態(生命力)と生感情の連関から、レアルな心的なものの因果性を捉えるならば、心的なものの因果性は、意識に告知されることで生感情と体験内容を関係づける現象的な因果性とみなされる。

## 凡例

第一次文献:シュタインの著作に関しては、エディット・シュタイン全集 (Edith Stein

Gesamtausgabe) からの引用は ESGA と略号を使用し、巻数と頁数を記載した。フッサールの著作に関しては、フッサール全集 (Husserliana) 略号を使用し、巻数と頁数を記載した。それぞれ引用・参照は ( ), 引用文の補足は引用文の中に [ ] において補足した。それぞれ翻訳のある著作は適宜参照した。

第二次文献: 著者名、出版年、頁数の順番で記載した。

## 文献

### 第一次文献

#### ■ Husserl, Edmund (エドムント・フッサール) :

[III/I]: *Ideen zu einer reinen phänomenologischen philosophie*, hrsg.v. W.Beimel, 1950. (エドムント・フッサール、1979、『イデーニ I-I』(渡辺二郎訳) みすず書房. エドムント・フッサール、1984、『イデーニ I-II』(渡辺二郎訳) みすず書房.)

[IV] : *Ideen zu einer reinen phänomenologischen philosophie, Zweites Buch*, hrsg.v. W.Beimel, 1952. (エドムント・フッサール、2001、『イデーニ II-I』(立松弘孝・別所良美訳) みすず書房、エドムント・フッサール、2009、『イデーニ II-II』(立松弘孝・榊原哲也訳) みすず書房) .

[XXV]: *Aufsätze und Vorträge: 1911-1921*, ed. Sepp Hans Rainer, Nenon Thomas, Nijhoff, Dordrecht, *Philosophie als strenge Wissenschaft*, 1987, SS.3-62. (エドムント・フッサール、1970、『厳密な学としての哲学』(佐竹哲雄訳)、岩波書店) .

#### ■ Stein, Edith (エディット・シュタイン) :

[ESGA5]: *Zum Problem der Einfühlung*, 2. Aufl. 2010.

[ESGA6]: *Beiträge zur philosophischen Begründung der Psychologie und der Geisteswissenschaften* , 2010.

[ESGA8]: *Einführung in die Philosophie*, 2. Aufl.2010) .

#### ■ Lipps, Theodor (テオドール・リップス)

[Lipps: 1901]: *Das Selbstbewusstsein; Empfindung und Gefühl*; Wiesbaden : Bergmann, 1, Aufl. 1901.

[Lipps: 1903]: *Ästhetik: Grundlegung der Ästhetik*. Hamburg and Leipzig: Leopold Voss, 1, Aufl. 1903.

[Lipps: 1909]: *Leitfaden der Psychologie*, 3st Edition. Leipzig; Wilhelm Engelmann, 3, Aufl. 1909.

#### ■ Pfänder, Alexander (アレクサンダー・プフェンダー)

[Pfänder: 1911]: *Motive und Motivation*, München, 1963, 123-156.

[Pfänder: 1920]: *Einführung in der Psychologie*, Leipzig, 1920.

### 第二次文献

Betschart, Christof, 2011, *Was ist Lebenskraft?; Eine Auseinandersetzung mit Edith Steins Untersuchung „Psychische Kausalität“*, Päpstliche Universität Gregoriana Philosophische Fakultät.

Genki Uemura, Toru Yaegashi, 2012 , Alexander Pfänder on the Intentionality of Willing, *Philosophia Verlag GmbH*, 243-274.

Genki Uemura, Alessandro Salice, 2018, Motive in Experience: Pfänder, Geiger, and Stein, *Phenomenology and*

*Experience*, 129-149.

Genki Uemura, 2020, Alexander Pfänder's Phenomenology of Motivation, *The Routledge Handbook of Phenomenology of Agency*, 29-40.

MacIntyre, Alasdair, 2006, *Edith Stein; an philosophical prologue*, Rowman & Littlefield Publishers, Inc.

———, 2007, *Edith Stein; A philosophical Prologue 1913-1922*, Rowman & Littlefield Publishers, Inc.

Lebech, Mette, 2004, Study Guide to Edith Stein's Philosophy of Psychology and the Humanities, in: *Yearbook of the Irish Philosophical Society: Voices of Irish Philosophy 2004*, Maynooth 2004, 40-76.

Rang, Rernherd, 1973, *Kausalität und Motivation; Untersuchungen zum verhältnis von Perspektivität und Objektivität in der Phänomenologie Edmund Husserls*, Maetinus Nijhoff.

Zahavi, Dan, 2014, *Self and Other; Exploring Subjectivity, Empathy, and Shame*, Oxford University Press.

植村玄輝、2015、「現象学的実在論と感覚説」『現象学年報』第31号、99-107.

八重樫徹、2009、「行為、因果、責任：フッサールとプフェンダーの「動機付け」概念を巡って」『フッサール研究』第7号、24-36.

(なかがわだん・上智大学)